

資料紹介

『横須賀惣庄屋覚帳』（掛川市教育委員会所蔵）

1 はじめに

『横須賀惣庄屋覚帳』は、江戸時代に遠江国横須賀の町場の惣庄屋（月番で交替する町場の代表庄屋）が残した記録である。原題は「惣庄屋覚帳」「御用番帳」「御用留」など様々であるが、資料的な継続性を勘案して一般には『横須賀惣庄屋覚帳』と呼ばれている。原本は掛川市教育委員会が所蔵されており、市の指定文化財であるが、当歴史文化情報センターでは現存する原本 44 冊のうち 37 冊について、CH(写真紙焼き)を仮製本で所蔵し、センター内の公開と平成 20 年 4 月開始のインターネットによる公開許可をいただいている。

現存している『惣庄屋覚帳』は、12 町の庄屋が月番で惣庄屋を勤め、元禄 5 年(1692)頃から明治 2 年(1869)にかけて（途中天明 7 年 8 月～寛政 7 年 8 月、文化 13 年～天保 2 年、弘化 4 年 7 月～嘉永 2 年 4 月など歴史文化情報センターでは残念ながら紙焼きを所蔵していない期間もある）記録を残したのである。当該期の横須賀は藩主西尾氏が城主を勤めた横須賀城の城下町であり、内容は触書や訴状・願書の写し、物価など多岐にわたるが、公式に見られることを前提としていないため、時に“本音”が垣間見られる。多くの城下町が東海道沿いにある宿場町を兼ねているのに対し、東海道から外れ宿場町ではない横須賀は、城下町の特性を究明する上で貴重なフィールドである。

2 『惣庄屋覚帳』に記載された物価変動

『惣庄屋覚帳』の多岐にわたる記載の中で特に目を引くのが、銭相場や物価に関する記載である。正徳年間から散発的に記載がある（銭相場についてはかなり多くのデータが集積できる）が、遅くとも天保期（1830 年代）からは毎月 8 日、18 日、28 日に相場を報告するようになる。それ以前でも 18 世紀後期（安永期末から天明期初頭ころ）からは、8 日、18 日、28 日に相場に関する記載があることが次第に多くなるので、定期的に相場書が出されるようになっていたようである。品目については、天明 2 年 (1782) 10 月 8 日に、胡麻油・燈油・酒・塩の相場が初めてまとめ記載され、天保 13 年(1842)4 月 8 日の相場書からは、原則として米・糯米（もちごめ）・大豆（上大豆・下大豆）・小豆・大麦（上麦・下麦）・小麦・胡麻油・燈油・酒（片白酒・並酒）・塩・銭の相場について記載されるようになる（塩と銭は「御用相場」と「地相場」の 2 種類が記載されるようになる）。右の [史料 1] は文久 3 年(1863)9 月の例である。

ところで、天保 13 年 4 月が相場書の

相場書上		[史料 1] (文久三年九月)	
九月八日	米金壹分二付壹斗壹升三合壹勺四牙	但老升二付百四拾四文	十八日
	糯米金壹分二付九升五合四勺	但老升二付百七十文	廿八日
	大豆壹升百丁五拾文		
	小豆壹升百六拾文		
	大豆金壹分二付式斗六升式合五勺		
	燈油壹升七百七十六文	燈油式拾文上ヶ八百文賣	
	胡摩油壹升八百五十六文	老合八十五文	
	片白酒壹升式百三十文	但老合八十五文	
	(貼紙)		
	新酒壹升百七十式文		
	塩壹升 御用百式文		
	御用銭金老兩二付 六貫六百文		
	地賣銭金老兩二付 六貫五百四十八文		
	但老分二付老貫六百三十六文		
切賃	拾文		

(請求番号 55001 yk33)

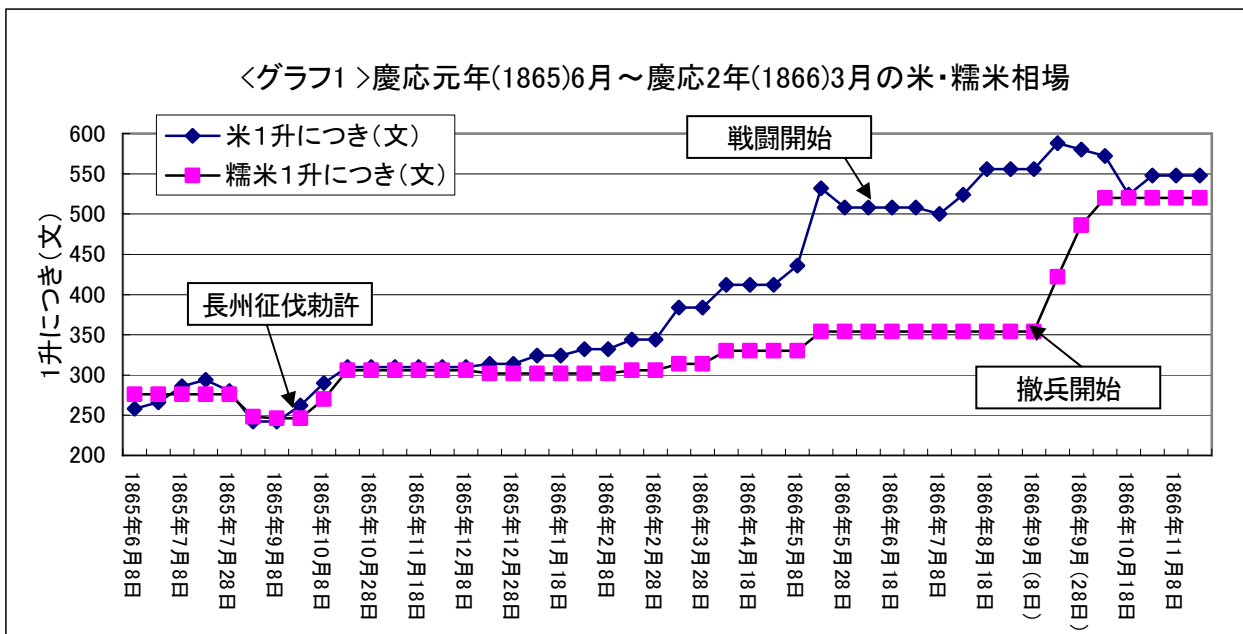
画期となっているのは、天保13年(1842)3月に諸国の株仲間も対象となる株仲間解散令が出され、3月26日に横須賀藩の町奉行から横須賀の町へ問屋仲間の解散が命じられたことに対応して、「是迄米問屋より差上候相場付、月番庄屋より差上可申様被仰付候」と、4月以降、米相場についても月番庄屋が米屋に代って相場を報告するよう命じられたためであった。なお、銭相場についても、天保13年4月以前は例えば[史料2](天保8年=1837)に見られるように、米問屋から報告されていたため、4月以降は月番庄屋から報告されるように変更されたと考えられる。

一 十八日 銭相場
米問屋より申来り候 御用六貫七百四拾文
地 六貫七百文
(請求番号 55001 YK17)

「史料二」(天保八年十二月)

3 物価変動の例

さて、これらの膨大に残る相場に関する記載によって、特に天保期(1830年代)～幕末(1860年代)の物価の推移については、概ね10日ごとに相場を把握できる。なお、諸品の相場変動は掛川宿・袋井宿・見付宿の相場と密接に関連していたので(しばしば「三宿相場」が提出されている)、磐周地区の相場変動とほぼ一致すると考えられ、この地域の基礎資料としても活用できると思われる。



＜グラフ1＞は、第2次長州征伐の期間の米相場と糯米(もちごめ)相場に関する相場書上を抽出してグラフ化したものである(紙幅の関係で横軸は約20日間隔になっているが、グラフのプロットは10日間隔になっている)。これによると、長州征伐の勅許が出る(慶応元年9月21日)頃から米相場が上昇を始め、戦闘開始(慶応2年6月7日)の前に上昇が止まる。その後、将軍家茂の病死が公表され(8月20日)、慶喜が撤兵を開始(9月19日)する頃から、今度は糯米相場が急騰するのである(ちなみにこのころ、「早飛脚」で伝えられた大政奉還の情報は7日後に、「大早飛脚」で伝えられた鳥羽伏見の戦いの情報は5日後には横須賀の町に伝わっている)。なお、『惣庄屋覚帳』の物価の記載を拾っていくと、第1次長州征伐(1864年)の時にも撤兵の際に糯米相場が高騰しており、出兵の際と撤兵の際では兵糧が異なるものと考えられる。このことも含めて、相場の推移に関してだけでも、興味深い点や検討すべき点は多い。

＜参考文献＞

近世小城下町の一様相—『横須賀惣庄屋覚帳』について—(本多隆成)『日本史論集』(時野谷勝教授退官記念事業会編)